

デリー行きの長距離バスに乗る。途中で夕食タイム。各自適当にお店に入り、好きなものを注文する。テーブルは幾つもあるのに、一人のオジサンが私の前に座った。どうやら私と話したいらしい。彼は英語が堪能でこんな話になった。

『インドの最大の問題は、とにかく人が多い事。そしてそれに伴う失業率の高さだよ。日本には失業問題なんてあるのかい?』

因みにインドの失業率は公表されていない。どういう状況が“失業”なのかも定まっていないのだと思う。

インドに来る前にインターネットで調べたら、60%と書



いてあるページがあった。幾らなんでも大袈裟すぎると思ったが、どの街でも、いい大人が平日の昼間から路上でクリケットをしているし、ゴミあさりも多い。また誰もが興味を持たないようなゴミのような物を路上で気長に売っていたり、あたかも店番の様に店の前に座っているだけの人も多いので、そういうとりあえずなんかやって一応生きている人まで含めたら、失業率はかなり高い数字になる事は間違いない。でも日本だって、20人に一人は失業者だ。こう答えた。

『ソリヤーあるよ、しかも今は戦後で最高。大問題になっている。5%以上だよ』

『5%? そりゃナッシングだよ。世界中どこの国でも5%程度ならベリーグッドだぜ。それが日本の最大の問題なのかい?』

ふと考えた。日本の最大の問題って一体何だろう。旅をしていると、日本の現状、日本の歴史、日本の政治そして自分自身について見詰め直す機会がとて多くなる。

日本の最大の問題が一体何なのかよく分からないが、彼は失業問題に興味があるみたいなので一応こう答えてみた。

『ニートって言葉がある。NEETだ。Not in Employment, Education or Training という意味で、つまり仕事も勉強も職業訓練もしたくないという、働かない若年無業者の事で、日本には100万人もいるんだ。これは人口の1%近いんだよ。失業者の統計に現われてこないんだけど』

『ってことは、日本の実質失業率は6%以上なのか』

『まあ、そういう事になるけど、この1%は深刻な問題だよ。仕事がないんじゃないで、働く意思がないんだから』

『なんだエレクトロニクス大国の日本にもそんな問題があるとは意外だなあ。インドじゃ考えられないぞ』

『まったくだ。日本の恥だよ。インドじゃ、みんな明日の飯を食う為に仕事を必死で探してるもんね。見せてやりたいよ、この100万人に』

『おおっ、ソリヤいい考えだな。日本で働きたい失業者なんて山ほどいるから、インドからはそんな連中を100万人送るから、日本からその100万人送ってくれよ』

『いいね、交換失業者制度だね。了解』

という事になったので、ニートのみなさんは是非、応募して欲しいところだ。

きっと人生が変わる。

さて、ここで、長期の旅人はどうなるんだろうと、ふと思った。

仕事も勉強も職業訓練もしていない。じゃあ、私も今はニートか、と思ったが、ニートの定義が15~34歳(の未婚者)なので、入らないんだな、これが。

よかったよかった(って、もっと深刻って事だな、やっぱり)。

牛のいる風景

インドに長くいると、牛のいる風景が当たり前になってくる。乞食よりも乞食牛の方がいっぱいいる。

デリーの様な大都市には草が生えている土地がほとんどないので、さすがに野牛はいないと思っていたが、実際に来てみるとたくさんいた。

私も最初はもの珍しくて、近くまで走り寄って行って写真を撮ったものだが、今では牛が近づいてくると軽くパンチを食らわせながら逃げたりする。

インド人も蹴飛ばしたり、ほうきで追っ払ったりしている。

牛は、羊やヤギのように気が小さくない。

体のでかさもそうだが、態度も堂々としている。

いやはっきり言おう。態度がでかい。でかすぎるぞ、インド牛。

牛が草を食んでいる田園風景は素敵だが、街中でゴミをあさる牛は嫌いだ。

インド人は中国人に迫るくらいゴミに関するモラルが低く、バスの窓から容赦なくゴミを捨てるし、狭い露地でも躊躇なくゴミを捨てる。でもたぶん低い身分のカーストの人たちが片づけてくれているのだと思う。時々うずたかく一ヶ所に集められたゴミを見かける。でもそのゴミを、牛が一斉に狙うのだ。

時には、飼っている犬の餌なんかも狙う。犬が狂ったようにギャンギャン吠えて威嚇するが、

『お前はただの番犬、俺は神様の使い』

とばかり無視して平然と食い漁っている。



露地からぬっと現われる牛。神様の使いの割には、けむたがられている気がする。

インドの牛の数は正確に掴めてないらしいが、聞けば2億頭以上いるらしい(北海道の牛は125万頭だ)。水牛まで入れると4億頭という数字もある。インドの牛の、せめて半分がいなくなってくると、何千万人もの飢えた人が助かるという話を読んだ事がある。牛がいる為に現在は使えていない土地を、穀物生産など有効利用できるためだ。

被害はそれだけではない。

インドの牛は痩せているし、都市にいる牛は草ではなく残飯や新聞を食っているのも事情は違うと思うが、一般に牛は1日に400リットルのゲップをするらしい。そのゲップにはメタンが入っていて、これは二酸化炭素の21倍も地球を温暖化してしまう。

ニュージーランドなんて、排出される国内の温室効果ガスの半分が家畜から出てしまっているというデータもあるそうだ。

そういえば京都で開かれた地球温暖化防止国際会議で、『牛のゲップも問題だ』と指摘する国があって、インドの代表が慌てた、なんて話も確かあったっけ。

大体 “神様の使い” を、“牛” という大きなカテゴリーでまとめてしまったのがイカンのだ。牛には “何とかアングス” や “ブラウン何とか” などの種がいるだろうし、せめて茶、黒、白黒のぶちだったとか、角の形なんかで、“お使い” をしたっていう種類の牛をもっと特定できるに違いない。

そうなれば、“お牛様” の牛と、“美味しく頂ける” ただの牛に分けられて、吉野屋も進出できるに違いない(ああ、牛丼食いたいぜ)。

“お牛様” の牛の方には、日本の犬並みに、インドのサリーかなんかを体に纏わせれば有難さが増しそうだ。インドの太陽の下で着るサリーは女性をとてとても綺麗で優雅に見せる。きっと牛にも似合うはず。

インドにはどんな小さな村にも、生地屋さんが大抵あるので、お布施代わりにくれそうだ。



サリーの国インドらしく、街には生地屋さんが多い。サリーは地方や階層、年齢によって着方が変わるみたいだ。

一方、ただの “牛” の方はいっその事、インドの牛を 1 億頭ぐらい、パキスタンに持って行ってしまった方がいい。パキスタンのビーフカレーはとことん美味しいのだ。一食分に牛肉が 50 グラムとして、牛一頭から 400 キロの牛肉を取るとすると、何と 8000 億皿分のビーフカレーだ。

世界中の人々と仲良く食べても 4-5 ヶ月は毎日ビーフカレーが食べられる。ヒンドゥー教徒は食べないから 5-6 ヶ月だな。パキスタンのビーフカレーなら半年ぐらい毎日食べ続けても飽きないのになあ。

イスラエル人

“やたらいる” ってだけで牛の話から連想してしまうと怒られそうだが、インドにはイスラエル人がめっちゃめっちゃ多い。イスラム国のパキスタンでは一人も見なかったが、デリーにいと、毎日 100 人ぐらい見かける。

にわかには信じがたいが、同じ宿で知り合ったイスラエル人が言うには、何でも常時 5 千人ぐらいのイスラエル人がインドにいるらしい。人口たった 600 万人のイスラエル人が、である。

レストランに入れば、朝は『コンチネンタル、アメリカン、インド、イスラエルあります』みたいな事が書いてあるし、夜は『インド、イタリアン、フレンチ、イスラエルあります』と書いてある。

店先には、これってきっとヘブライ語だろうな、という看板も多い。

イスラエル人の多くは兵役を終えると皆世界を旅するという。しかし彼らが簡単に入国できる国

はそれほど多くないとは聞いていた。中東なんかほとんどだめだ。南米は OK なのでイスラエル人が多いのだが、インドにも実に多い。

イスラエル人は日本にも多い。偽物のロレックスや、安っぽい指輪、金属製の飾りなんかを街頭で売っている若者の 9 割は、イスラエル人と聞いた事があったが、この彼曰く、日本にはイスラエル人のそういうネットワークがあって、誰でも仕事にありつけるんだそうだ。彼もあと数ヶ月したら日本でクリスタル製品を売る事が決まっているらしい。

インドはパキスタンとの軍拡戦争の際、何十億円分もの武器をイスラエルから買っているから、もともと経済面でも結びつきが強いのだが、『今、このホテルのレストランに座っている回りの連中は皆イスラエル人だよ』と聞いた時には、なるほど旅人の数もすげーや、と驚いた。

デリーの街

長い事ヒマラヤの山にいてデリーに下りてきたもんだから、いきなり人が多くて面食らった。デリーには五感に訴えるものがある。

冬のこの時期、デリーはベストシーズンという。

夜は確かに過ごしやすいが、昼間の日差しは強い。外にいるとねっとり汗ばんで気持ちが悪い。空気は埃っぽい上に排気ガスで汚れている。車やバイクのクラクションや客引きの声はガンガン耳に響いてくるし、香辛料だの牛の臭いだのが鼻を突く。ギラギラの看板、鮮やかな店先の香辛料、派手な色のサリーを纏った女性、いろんなどぎつい配色が目を刺す。

ぼんやり歩いていると、後ろから来たりキシャにぶつけられるし、よければ牛にぶつかったりする。道端の牛のウンコや乞食にも注意が必要だ。

インドの飲み物

散歩していると、直ぐに喉が痛くなってくるので、街角でラッシーを飲む。

ラッシーとはヨーグルト系の飲み物で、果実を混ぜたものもある。

店先には大きな金属の器でヨーグルトが作られていて、そこから少量をすくい取り、シェーカーで作る。

周囲には甘いにおいが広がっていて虻が飛び回り、またシェーカーに入れる氷は生水という事があるので、ちょっと恐いが、これが結構美味しいのだ。

因みにバナナラッシーは 12 ルピー(29 円)。

ラムネなんかも売っている。昔日本で売っていたものと形は同じ、ビー玉入りだ。味はレモン味。1 本 5 ルピー(12 円)。

ヒンドゥー教徒はあまり酒を飲まないガイドブックに書いてあるが、人口の割に酒屋が少ないからか、デリーの酒屋は大繁盛している。

ビールの値段も観光地と違い 630 ミリリットルの瓶が 35 ~ 40 ルピー(85 ~ 98 円)で他の国と



ヨーグルトに砂糖と水、時には果物(のエキス)を混ぜたラッシーを露店で売っているお店

同じレベルだ。

ある店でチャイを飲んだらとんでもなく美味かったので、どの店で紅茶の葉を買うのか教えてもらい、200ルピー(488円)分ほど買うことにした。

なんと2キロ分だった。葉っぱだから嵩がある。小さめの枕ほどの大きさだった。

デリーのマーケット

これまでたくさんの国のマーケットを見てきたが、このデリーの訳の分からない活気と、

『こんなの買う人いるのかよ』

という様なものを遅く売っているところは他にない。

歯が描かれたボードが目に入った。てっきり歯磨き粉か歯ブラシかと思ったが、それはなんと中古の入れ歯。

自分のぴったり合うものを試着？してから買うのだろうか。

義足なんてものも売っている。

全くたまげるマーケットである。



インドのマーケットでは、新品、中古問わずなんでも売っているのだが、入れ歯まであるとは。

通りは人と牛と荷車とリキシャでごった返している。

通路も車道も関係ない。

インド人は人に道を譲らずに、とことん前へ進もうとするのでにっちもさっちも行かない渋滞になっている。

荷車や人が運んでいるずた袋から零れ落ちるのは、豆だったり何かの花のつぼみだったり紅茶の葉っぱだったり。

路上は、ゴミも牛のウンチも含めいろんなものが散らかっているのだ。

ふとみると、歩道に突然公衆便所(男性用)が現れた。

天井は無い。そして場所によっては、壁だけというところもある。



大通りの歩道に突如現われる公衆便所(男性用)。因みに露天である。

帰国が近いから、お土産、というか日本での生活必需品なんかを買う為にマーケットを歩いているのだが、実は同時に探しているものがある。

それはインドにしかないサービスだという。

パキスタンからインドに入って以来、もうずっと探しているのだが、未だにお目にかかれていない。

プロの【耳かきおじさん】である。

このマーケットにいなければ、もうチャンスは無いと2時間ほど探して、ようやく見つけることができた。

ちょっと痛い、さすがプロ。

ぱっちり痒い所に行き届き、かつごっそりと耳かすが取れて驚いた。大分溜まっていたようだ。彼はもう15年もこの場所で耳を掻き続けているそうだ。

本来は5ルピー(12円)だが、10ルピー払ってあげた。満足満足。



インド名物「耳かき屋さん」。この場所で、もう数十年商売をしているらしい。

インドの旅ももうすぐ終わる。

紅茶も買ったし、耳もかいた。

最後に飛び切り美味しいカレーを食べたい。

でもベジカレーは既に食い飽きたので何かの肉が入っているものを食べたい。

そこでデリーのイスラム街に行く事にした。

ジャマーマスジッドというモスクがある。インド最大規模のモスクで・・・なんて事はどうでもよくて、大事なのはその周辺だ。

籠に入ったニワトリや、羊の頭、肉をさばく刀やイスラムの暦なんかがあるところ狭しと並んでいる。

インドのルピーは海外持ち出し禁止で見つかるのと没収になるので、使い切る必要がある。

そこで一番高そうなカレーレストランに入る事にした。パキスタンカレーだそうだ。

50種類はあるだろうというカレーのメニューの中から、鳥のカレー、羊のカレー、ヤギのカレーを選んだ。ヤギのカレーは脳みそ。

どのカレーもめっちゃめっちゃ美味かった。



インドのパキスタンカレー屋さん。左下のカレーは、「ヤギの脳みそカレー」

インドの旅

インドの地球の歩き方は他にはないくらい“トラブル実例”が充実していて、その中でもデリーは特に注意を促すコラムが多い。悪徳ショップが多く、とりわけ悪徳旅行社が大活躍しているそうだ。

「地球の歩き方」曰く、

『本書に「よい旅行者として推薦します」という日本人からの投稿があっても、あなたが相場を知らない、その店は突然悪徳旅行社に変身し、抜け目なくぼったくるから注意』

という趣旨の記載まであるくらいだ(ガイドブックとして逃げている様な気がしないでもない)。

『インドへ行く者は必ず人間不信になる』と多くの旅行者達から聞いていた。でもこれまではあまり腹の立つ事はなかった気がする。ぼったくりも嘔吐きも多かったが、『やっぱりな』という範囲のものだ。通ってきたのが北インドだからかなあ、とインド通の旅行者に聞いてみると、南インドの人たちの方が温厚で正直なんだそうだ。

またインドに来たら、『誰でも一度は下痢の洗礼を受ける』のが常識らしいが、北インドは寒かったせいか、全く問題なかった。

さすがに大都市デリーでは必ず何か厄介なことがある、と覚悟していたがそうでもなかった。

- ・床屋に行ったら(20 ルピー(49 円))シャボン無しでひげを剃られて痛かったとか、
- ・切手の裏を舐めたら、糊がやけに不味かったとか、
- ・20 ルピー分の香辛料を買ってみたら予想の 10 倍もくれて邪魔になったとか、
- ・可愛い日本の女性と知り合ったら人妻だったとか(おい、またかよ)

ぐらいなもんで、それほど悪い事がない。

インド全土をじっくりと、1 年や 2 年、人によっては 5 年も旅している猛者がたまにいる。

私とは言えば、いつものようにせわしくその国の名所や温泉を回るのでなく、インドについては、どっかりと腰を据えた。

回ったのは北インドだけで、バラナシもカルカッタも、ボンベイも、あのタージマハルさえも行かなかった。そして予期しないハプニングもほとんどなかったので、インドに関してはまだ初心者である。

でも今回、急いで回らなかったのは訳がある。

他の国と違ってどうやらこの国は、あと 10 年も 20 年も全く変わらない、と確信したからである。

最終回へつづく